

# 本山彦一蒐集考古資料の剥片尖頭器

渡邊 貴 亮

## はじめに

関西大学博物館には、本山彦一蒐集考古資料（以下本山コレクション）が所蔵されている。この約19,000点の一括資料群は、2011年に登録有形文化財として登録されている。

本稿では、本山コレクション内より発見された旧石器時代遺物について紹介するとともに、その蒐集地について若干の考察をおこなう。

## 発見に至る契機と資料化にいたる経緯

剥片尖頭器は、『関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料目録』（関西大学博物館2010）に「MY-U4087」として記載されている資料である。本資料は本山コレクションの目録作製のための再整理中に見出されたものである。目録では本資料が剥片尖頭器と呼ばれる石器であり、九州島における後期旧石器時代の遺物であることを考慮し、確認資料名を「旧石器」と表記している。山口卓也氏によって本資料が旧石器に属する資料であることは確認されたが、その後は特に展示や研究に供されることはなかった。

2017年、筆者は本資料の存在を聞きおよび、資料化と本誌への執筆の機会を得た。そこで、本資料の資料化によって、今後の剥片尖頭器の調査研究の一助とするため、また、大阪府内に

所在する貴重な九州島の旧石器資料として広く活用されることを期待し、本稿の執筆に至った。

## 本山彦一蒐集考古資料の剥片尖頭器

本資料は、剥片尖頭器と呼ばれる後期旧石器時代の資料である（図1・写真1）。残存長5.3cm、幅2.98cm、厚さ0.85cm、重量は11gである。先端部をわずかに欠くが、ほぼ完形である。表面は激しく風化が進んでいるが、新欠部の観察より石材はホルンフェルスであると考えられる。

やや幅の広い縦長剥片を素材としており、主要剥離面側からのブランディングにより、剥片尖頭器に特徴的なノッチ様の基部を作り出している。石核上の剥離面を打面として用いており、打点は除去されていないが、基部の作り出し時にバルバースカーによる凹凸を除去しようとしているようにも見て取れる。表面には3枚の先行する剥離痕が残されており、概ね剥離軸も揃っている。縦長の素材剥片を連続して剥離した石核から、本資料の素材剥片は剥離されている。

尖頭部の欠損は衝撃剥離痕の様相を呈しており、風化の度合いが器面と同様であることから、使用もしくは廃棄に伴う欠損であろう。その横にみられる右側縁先端部付近のやや微細な

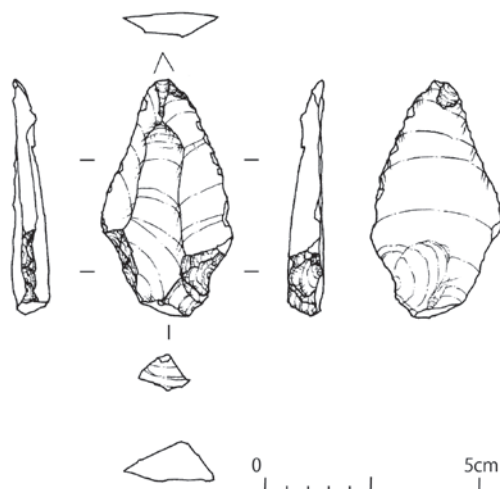


図1 MY-U4087実測図



写真1 MY-U4087

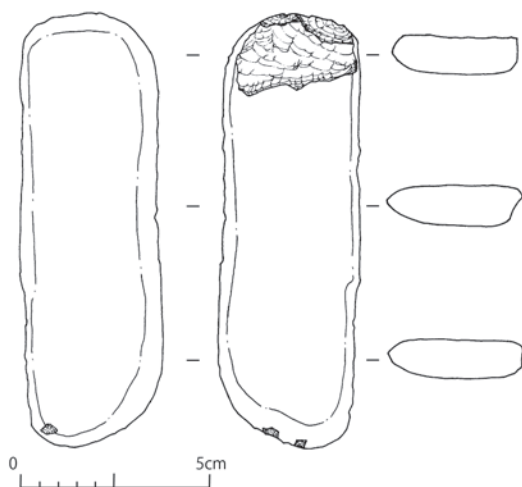


図2 MY-U4097実測図



写真2 MY-U4097

剝離痕は、衝撃剝離痕以前に施されており、本資料は基部および先端部付近に二次加工が施される型式の剝片尖頭器であろう。

主要剝離面の剝離角は99.7°を、基部右側のプランティング角度は約70°、基部左側のプランティング角度は約55°をなす。

石器の表面には朱書きで「日向」の文字が、裏面には墨書で「矢の根」の文字が注記されている<sup>1)</sup>。

さて、ここでもう1点本山コレクションを紹介しておく。「MY-U4097」として登録されている資料である(図2・写真2)。本資料は、扁平な川原石の両端に剝離痕を有するが、剝離痕からは明確な人為性を見出すことは困難である。ハンマーストーンの可能性を考慮したが、剝離痕の剝離軸や打点の状況などから敲打に伴う剝離とは認定しがたい。両端の剝離痕は自然為の割れであろう。

長さ11.5cm、幅3.85cm、厚さ1.28cm、重量98gであり、石材は石英片岩<sup>2)</sup>であろうか。本資料も、MY-U4087と同様に表面に朱書きで「日向」の文字が、裏面には墨書で「石斧」の文字が注記されている。

### 剝片尖頭器の蒐集地について

先に紹介した2点の資料は、表面に朱で地名を、裏面に墨で器種名を記す注記の方法や字体から、同一人物による同時期もしくは極めて近

接する時期に蒐集・登録された資料である可能性が非常に高い。これらの資料は、1点が九州島で多く出土する剝片尖頭器であり、かつ「日向」の文字からみても、宮崎県内で収集された資料であることはほぼ確実であろう。

どのような経緯で本山氏のもとへと渡ったのかは不明であるが、1912年におこなわれた西都原古墳群の発掘調査の折には本山氏自身も宮崎県へ赴いており、あるいは本山氏自身が現地で収集したものかもしれない<sup>3)</sup>。

ここで、本山コレクションの一覧を参考にしてみると、確実に「日向」のものと判明している資料は11項目確認できる(表1)。表1のうち石斧が登録されている資料を確認したところ、MY-S1072には打製石斧が1点しか収蔵されていなかった。よって、MY-U4097はMY-S1072と同じ場所で蒐集された可能性が高い。

また、剝片尖頭器の裏面には「矢の根」の文字が確認できるが、矢の根とは鏃のことである。剝片尖頭器の用語は1970年代に入ってから、橘昌信氏や清水宗昭氏らによって提唱されており(橘1970、清水1973など)、本資料の登録時は鏃の一種との認識であったとしても、なんら不思議ではない。MY-S1072の項目には石鏃も登録されており、MY-U4087およびMY-U4097はMY-S1072と同じ場所で蒐集された可能性が高いと言えよう。

図3は宮崎県内の主な剝片尖頭器出土遺跡

と、MY-S1072の蒐集地を示した図である。表1にあるように、MY-S1072の蒐集地は現宮崎県延岡市天下町<sup>4)</sup>である。天下町付近に所在する主な剥片尖頭器出土遺跡は 2. 赤木遺跡 3. 野門遺跡 4. 吉野遺跡などがある。

図4はこれらの遺跡出土の剥片尖頭器である。この中で注目すべきは2・3・9の資料である。2・3は赤木遺跡第8地点出土の剥片尖頭器である。大きさや形態の他に、素材剥片の打面を除去しない点や基部の作り出し方、ブランディング角など多くの点でMY-U4087と類似する。特に2はその傾向が顕著である。しかし、これらの剥片尖頭器のほとんどが白色流紋岩を石材として用いており<sup>5)</sup>、風化が進行したMY-U4087と色調、質感共に似通っているが、石材が異なることにも注意を払う必要がある。

9は吉野遺跡出土の剥片尖頭器である。大きさや形態はもとより、表面に残されている石核上で剥離された先行する剥離痕の構成が極めて近似している。これは、MY-U4087と同様の手順で素材剥片が剥離されている可能性が高い。

ここまで、大まかにではあるが、本山コレクション中の旧日向国蒐集資料とその周辺から出土している剥片尖頭器について概観した。剥片尖頭器についてはごく一部しか取り上げておらず、まだまだ検討の余地は残すところとなっている。特に、本資料を延岡市周辺の蒐集資料と推測した場合の石材利用の不一致が今後の検討課題となることは明白である。

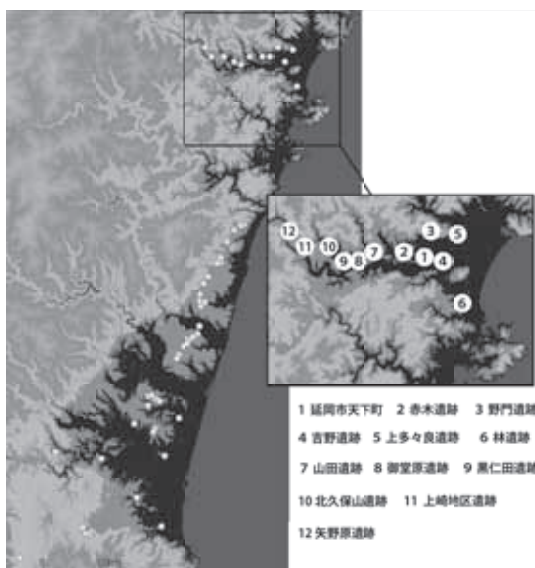


図3 遺跡分布図

しかし、本山コレクションというある程度の一括性を担保した資料群の中において、遊離した資料であることを勘案するならば、現状では天下町周辺蒐集資料と推測しても良いのではないだろうか。本稿における比較検討の結果をより積極的に評価するのなら、延岡市所在の赤木遺跡もしくは吉野遺跡の資料である可能性を示唆するものである。また、MY-U4097のような石材は、宮崎県南部の遺跡ではほとんど見られず、宮崎県北部の遺跡で見られるとのことである<sup>6)</sup>。この様相もまた、この2点の資料が宮崎県内では北部に位置する延岡市所在の遺跡から蒐集された可能性を示唆するものであろう。

### おわりに

本稿では、本山コレクションに含まれる数少ない旧石器資料である剥片尖頭器と、それに伴う石製資料について紹介し、蒐集地について若干の考察をおこなった。MY-U4097資料については、遺物とは認定できなかったが、本山氏が明確な人口品のみならず僅かな加工のような痕跡を有する資料までも、積極的に蒐集対象としていた姿勢が看取される。

剥片尖頭器には「日向」「矢の根」の注記が読み取れ、本資料が旧日向国（現宮崎県）内で

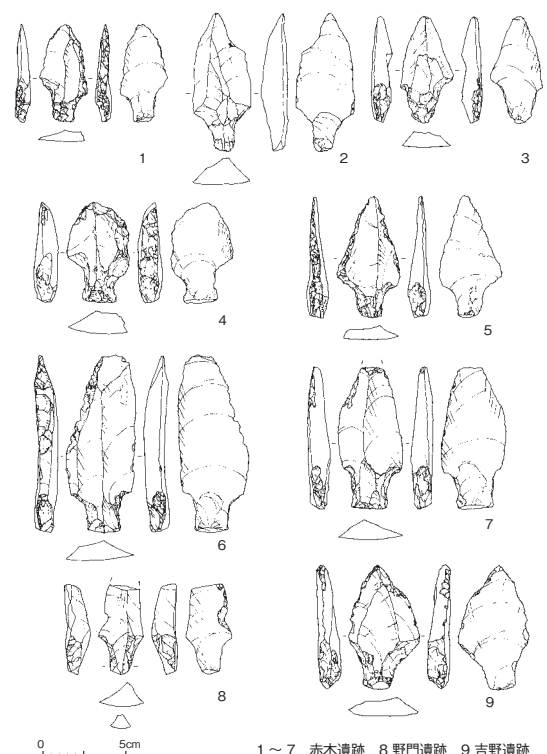


図4 周辺遺跡出土剥片尖頭器

表1 本山コレクション日向蒐集資料一覧

登録番号	資料名	本山要録地名	現行政区
MY-S1071	磨製石鏃	日向國東臼杵郡南方村字天下伊舞野	宮崎県延岡市天下町
MY-S1072	打製石斧2点・石鏃5点	日向國東臼杵郡南方村字天下伊舞野	
MY-S1073	磨製石斧・打製石斧	日向國東臼杵郡南方村字天下伊舞野	
MY-S1074	打製石斧	日向國東臼杵郡平岩村	宮崎県日向市大字平岩
MY-S1075	打製石斧・石錘	日向國兒湯郡美々津町美々津及石並	宮崎県日向市美々津町
MY-S1076	打欠石錘	日向國兒湯郡持田村	宮崎県兒湯郡高鍋町持田
MY-S1077	半磨製石斧	日向國兒湯郡都農郡村荒武	宮崎県兒湯郡都農町
MY-S1078	半磨製石斧	日向國兒湯郡内の野村	宮崎県兒湯郡都農町川北内野々
MY-S1079	半磨製石斧	日向國兒湯郡上江村字上江	宮崎県兒湯郡高鍋町上江
MY-S1081	打製石器	日向國西臼杵郡佐土原町	宮崎県宮崎市佐土原町
MY-S1082	打製石器	日向國西臼杵郡高千穂町	宮崎県西臼杵郡高千穂町

蒐集されたこと、当時は鏃の一種であると考えていたことなどが確認できた。

また、同様の注記をもつ石製資料を検討し、これらの資料が宮崎県延岡市天下町蒐集資料に帰属する可能性を指摘した。天下町周辺の遺跡出土剥片尖頭器を比較検討した結果、宮崎県延岡市所在の赤木遺跡もしくは吉野遺跡周辺からの蒐集の可能性を述べた。

本山コレクションの資料中には、本資料のように蒐集地が明確に判明していないものが多数含まれている。しかし、その豊富な資料内容のみならず、現在関西大学博物館に所蔵されるまでの経緯までもが、日本考古学史上きわめて重要な資料群であることを再度確認するに至った。

最後になりましたが、本稿の執筆にあたり関西大学博物館の山口卓也氏、山下大輔氏には大変貴重なご教示を賜りました。末筆ながら明記して感謝申し上げます。

- 1) 『関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料目録』には「山の根?」との記載があるが、山下大輔氏(関西大学博物館学芸員)のご教示により「矢の根」であることが判明した。
- 2) 筆者の肉眼観察に拠るため、今後専門的見識者の鑑定が必要である。
- 3) 『関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料目録』
- 4) 『関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料目録』では現在の「宮崎県西都市大字南方」と記載されているが、「東臼杵郡南方村」は現在の「延岡市」となっているため、本稿では「延岡市天下町」とした。
- 5) 報文参照。
- 6) 山下氏のご教示による。

図3はカシミール3Dを用いて作成。

図4は宮崎県埋蔵文化財センター2006・2007・2008・2009より筆者加筆修正して作成。

### 主要参考・引用文献

- ・関西大学博物館2010『関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料目録』
  - ・清水宗昭1973「剥片尖頭器について」『古代文化』第25巻第11号 財団法人古代学協会
  - ・末永雅雄編1935『本山考古室要録』
  - ・橘昌信1970「6. 周辺遺跡の調査(その2) - 宝満川流域の先土器時代 -」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 - 第1集 -』福岡県教育委員会
  - ・宮崎県埋蔵文化財センター2006『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第136集 野間遺跡 一般国道10号延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
  - ・宮崎県埋蔵文化財センター2007『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第155集 吉野第2遺跡 一般国道10号延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3』
  - ・宮崎県埋蔵文化財センター2008『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第165集 赤木遺跡第8地点(第三次調査) 一般国道218号北方延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(4)』
  - ・宮崎県埋蔵文化財センター2009『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第182集 赤木遺跡第8地点(第一次調査) 一般国道218号北方延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(6)』
- ※図を引用した発掘調査報告書以外は紙幅の関係上割愛いたします。

博物館学芸アシスタント  
文学研究科博士課程後期課程在学